

# 下ノ諏訪宿歴史探訪



発行：令和4年2月24日

下諏訪町公民館 第二区分館

## 「下ノ諏訪宿歴史探訪」小冊子発行にあたって

下諏訪町発祥の下ノ諏訪宿は中山道と甲州道中が交わる追分にあり、諏訪大社下社の門前町、また交通の要そして全国でも稀な温泉がある宿場町でとして大変賑わい、私たち二区区民の大きな宝であり、財産であり、誇りであります。

明治以降は製糸業の町、戦後は精密工業の町として大いに栄えましたが、鉄道の開通、駅舎が出来たことにより町の中心が南に移り、現在の二区は戸数が450戸くらいで高齢化率は極めて高く、半面子供の数は小学生で2~30人ほどであり、今後の区行政も大変厳しい状況にあります。

もう一度歴史と文化を守り、区民の皆さんが心ふれ合い元気溢れる二区になることを願い、二区分館は運営委員がワンチームとなり事業を行っています。

その一つが「下の諏訪宿歴史探訪」です。令和2年度、そして今年度は二区分館だけでなく10区分館と共催で行い「下ノ諏訪宿」の歴史を学び、貴重かつ、重要な財産を後世に伝えるため、そして町長の目指す観光「観光の産業化」に少しでも役立つことを願って開催いたしました。

そして探訪時に役立つことを願い広報部長を中心に企画室で10ページにわたるパンフレットを作成しました。お陰様で参加された皆さん、また公民館関係者や学校関係者から評価、称賛の声をいただきました。

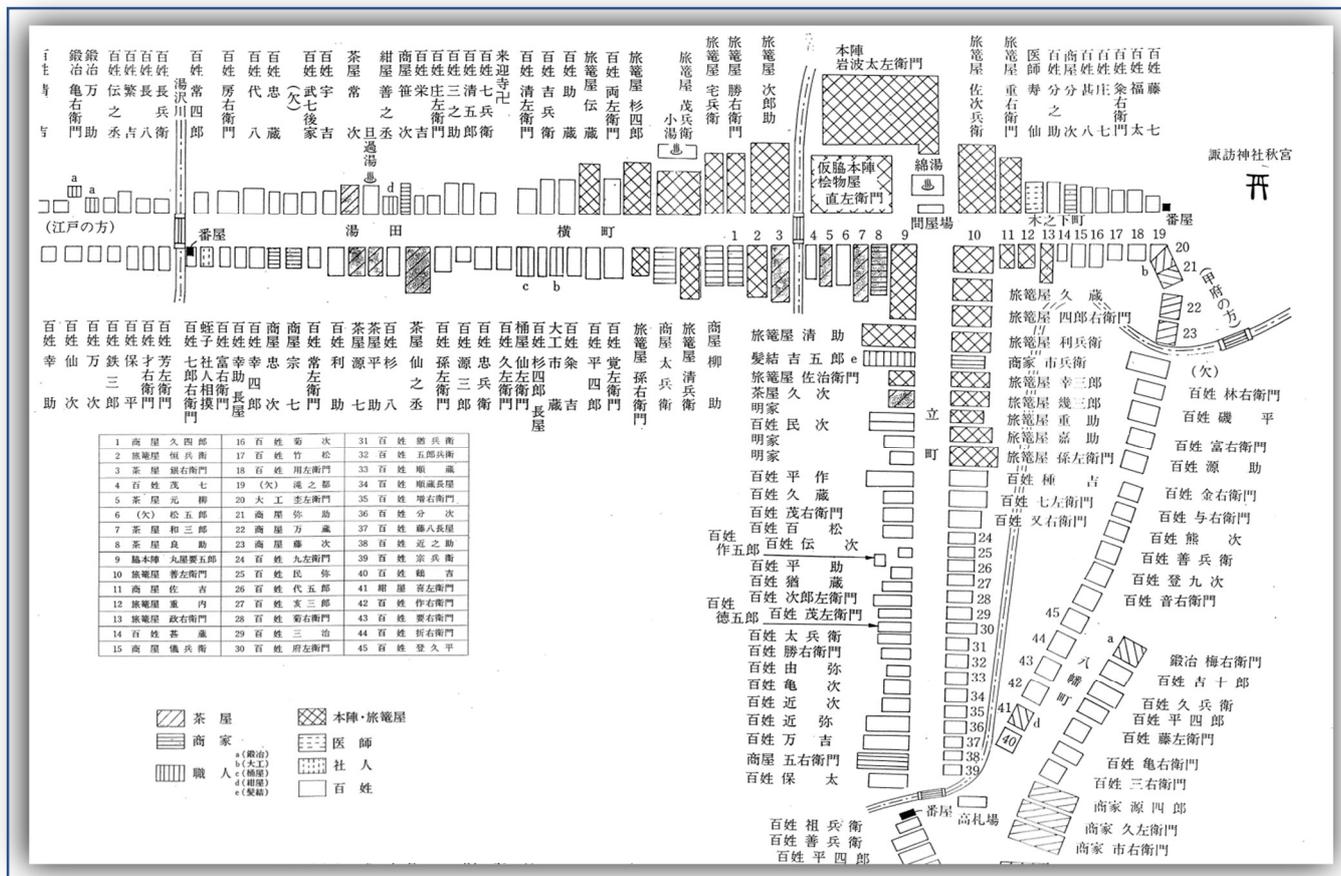
そこで、参加者以外の区民の皆さんにも「下ノ諏訪宿」の歴史を再確認していただきたいとの思いから、この小冊子を発行し全戸配布することにいたしました。

発行にあたっては町の肝いりの「未来へつなぐ歴史文化伝承事業」による補助金を活用させていただきました。

資料集め、編集、印刷、冊子作りまで企画室での手作りです。至らぬ点はあると思いますが、精魂込めての冊子ですのでご高覧いただきますようお願いいたします。

下諏訪町第二区分館長 山田貞幸

# 文久元年の下ノ諏訪宿図



## 下ノ諏訪宿

**概要**：下ノ諏訪宿は、中山道と甲州街道の接点（追分）にあり、交通・軍事上重要な地でした。



また、信濃国一宮である諏訪神社下社 秋宮の門前町として、また温泉町として発達した集落で、「湯ノ町」の名は、室町時代の天正3年史料に見られます。

江戸時代になると、街道の整備とともに街並みも整い、中山道六十九宿の一つとして大変賑わいました。（江戸から数えて29番目の宿場）町並みは長さ4町50間（約530m）、甲州街道中の分を合わせると8町49間（960m）あり、立町・横町・湯田町を中心に構成されていました。

**説明**：下ノ諏訪宿は、1575年（天正3）に成立したとされています。中山道中で唯一の温泉地であり、また諏訪大社があること、甲州街道と中山道の交わる場所であることから、江戸・京都・甲州方面それぞれから多くの人々の往来があり、中山道中有数の宿場町として、街道沿いには多くの旅籠や家々が立ち並び宿場町の中心をなす旅籠屋は、旅人や商人の疲れを癒す重要な場所でした。かつては賄いつきの宿はなく、薪代と部屋代のみを払って自炊をする木賃宿が一般的でした。旅人が多くなると賄いつきの宿が次第に多くなり、それらが旅籠屋と呼ばれました。

江戸時代を通じて旅籠屋と木賃宿が共存していましたが、旅籠屋は 1801 年(享和元)の明細によると 42 軒(大 2 軒、中 20 軒、小 20 軒)あり、その他には、茶屋が 2 軒、商屋が 15 軒ありました。宿の外れには木賃宿があり、巡礼者や下級の旅芸人などが利用していました。その当時は宿泊客が非常に多く、足の踏み場もない程に人が集まり雑魚寝をしていたようです。

下ノ諏訪宿の温泉は、前述のとおり中山道唯一の温泉場を有し交通の要所であったことから、地元の人々はもとより多くの旅人、藩主やその家来などにも利用されていました。また、下ノ諏訪宿周辺の地域が「湯之町」と呼ばれていたことから、温泉がこの町にとって重要な要素であったことがうかがえます。当時の下諏訪を代表とする温泉は、中山道沿いに位置する綿の湯・児湯・旦過の湯の3つの共同湯であり、各々の共同湯が古くからの歴史と効能を有していました。幕末の頃までは旅籠は内湯をもっていなかったため、宿泊客は旅籠の下女の案内で地元の人々と同じ外湯を利用し旅の疲れを癒していました。また、それらの共同湯はいつも賑わっていたということです。

\*綿の湯は、諏訪大社下社の七不思議の紹介でお話しさせていただきます。

\*児湯は、和泉式部伝説にまつわる鍔焼(かなやき)地蔵尊のご利益で湧き出したものといわれ、地蔵を背負ってきた最明寺入道時頼(鎌倉幕府の名執権(めいしっけん)とうたわれた北条時頼)や諏訪藩主も、延寿の湯として浴したそうです。



江戸時代、高島藩士の書いた『諏訪かのこ』という書物にも「気をめぐらし、血をおぎないよろず子をあらしむ」とその効能が記されています。

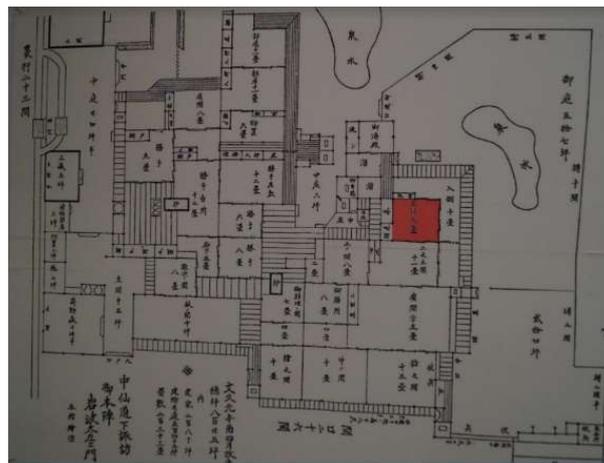
\*旦過の湯は、鎌倉時代の修行僧のために建てられた旦過寮が始まりとされています。旦過とは禅宗で、修行僧が一夜の宿泊をすることを言い、旦過の命名はその名残だそうです。

何れも歴史ある諏訪の三名湯として広く知れ渡っていました。

また下ノ諏訪宿は、宿場、湯治場、門前町としての3つの機能を有しており、諏訪大社下社の七不思議の一つに紹介される「綿の湯」あたりが大変賑わい、そこに「問屋場」が置かれ、その奥に「本陣」がありました。

慶長6年より元禄元年まで 88 年間 2 代小口弥右衛門が務め、元禄元年から明治維新まで岩波太左衛門が本陣問屋を務めました。(現在 岩波家 28 代目となります。)

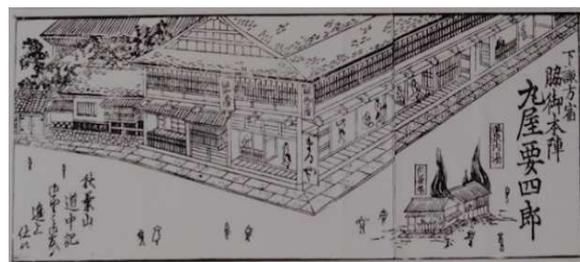
往時は 1 千 8 百坪の敷地の中に 3 百坪の主屋があり、皇族や参勤交代の際に大名や幕府の役人など身分が高い人達が宿泊や休息で利用し、文久元年(1861)11 月 5 日には



皇女和宮が宿泊、明治 13 年（1880）6 月 24 日には明治天皇が休息に利用されました。

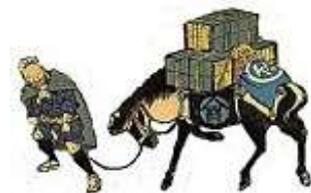
現在は、建物の約半分と中山道随一との呼び声も高い庭園が残され、日本名園 100 選に選定されています。

脇本陣は当初は小松孫次右衛門家、今井新兵衛家と年代とともに移転を経験してきましたが、幕末には丸屋要四郎家がその任を務めました。



### 豆知識

**\*問屋場（といやば）とは！**宿場でもっとも重要な施設であり、大きく2つの仕事がありました。一つは人馬の継立業務で、幕府の公用旅行者や大名などがその宿場を利用する際に、必要な馬や人足を用意しておき、彼らの荷物を次の宿場まで運ぶというものです。もうひとつは、幕府公用の書状や品物を次の宿場に届ける飛脚業務で、継飛脚（つぎびきゃく）とい



います。これらの業務を円滑に運営するために、問屋場には宿場の最高責任者である問屋（といや）の補佐役である年寄（としより）、事務担当の帳付が詰めていました。

**\*本陣とは！**江戸時代の宿場で、勅使や大名、旗本、役人、など身分の高い人が泊まった公認の宿舎をいいます。ここ下ノ諏訪宿本陣の庭園は、中山道随一の名庭園を誇り、上段の間から見る四季折々の装いは格別です。

令和 2 年 3 年と下諏訪宿の歴史探訪を開催し、岩波家 28 代目直々に歴史を語っていただきました。（令和 3 年 12 月は、10 区との共同事業でした。）



令和 2 年 11 月の庭園





\* 武田信玄からの感謝状



\* 相楽総三が囚われた時置いていった短刀



令和3年12月の庭園



## \* 諏訪大社下社の七不思議の紹介

### 1. 根入杉

秋宮境内の大杉。丑三つ時になると、枝を垂らしていびきを掻いて寝たといわれ、子供に木の小枝を煎じて飲ませると、夜泣きが止まるといわれています。

### 2. 湯口の清濁

八坂刀売命（やさかとめのみこと）が日頃使用していたお化粧用の湯を綿に浸し、その湯玉を置かれた所から不思議なことに、コンコンとお湯が湧きでました。その湯を「綿の湯」と名付けられました。

この「綿の湯」は女神さまのお使いになるお湯（ご神湯）ですので、心の汚れた者が入ると、みるみる湯口が濁ると言い伝えられています。

「神話と伝説 綿の湯」にあるように諏訪大社との関連でも由緒ある「湯」のようです。

このご神湯「綿の湯」は、江戸時代になり、中山道と甲州街道の分岐点に湧く温泉として、多くの旅人を癒し大変喜ばれ、旅人から旅人へ、口伝えで評判が広まり「諸国温泉効能鑑」（温泉ランキング）の中でも東の小結として「信州・諏訪の湯」と書かれました。



❀ **八坂刀売神**：諏訪大社の二柱おられる主祭神であり建御名方神（諏訪大明神）の妃神様で諏訪大社ほか、各地の諏訪神社などに祀られています。

### 3. 五穀の筒粥

春宮境内筒粥殿で行われる行事。1月14日から15日にかけて、炊いた小豆粥で1年の吉兆を占います。



### 4. 浮島

たびたび氾濫した砥川にあって、決して土が流れて無くならなかった島です。

### 5. 御神渡

神様の恋の通り道といわれるのが御神渡りです。

### 6. 御作田の早稲

御作田は6月30日に田植えをしても7月下旬には収穫できたと言われていています。6月30日の田植え神事そのものを指すこともあります。



### 7. 穂屋野の三光

御射山祭の当日は、必ず太陽・月・星の光が同時に見えると言われていています。

## 下ノ諏訪宿三大大騒動

### その1 皇女和宮様 下ノ諏訪宿に宿泊

和宮降嫁にあたり1861年旧10月20日京都から、和宮の行列は江戸に向かいました。

幕府は、衰えぬ威勢を示すため、お迎えの人数2万人を送ったということです。行列の長さは50Kmにも及び3-4万人の大行列だったと言われ、道路や宿場の整備・準備・警護の者たちを含めると総勢20万人にもなったそうです。この盛大な御輿入れの行列は、世界でも比類の無いもので、総費用は今のお金にして約150億円かかったとのこと。



1861年旧11月5日中山道を江戸に降嫁し下ノ諏訪宿に宿泊されました。

和宮 下ノ諏訪宿お通り、お泊りに際して、見苦しい事やあやまちや無作法があつてはならないので、通行筋や宿場中は無論、周辺の村々の住民に対して、藩や宿場役人等から、厳しい申しつけや触状が出されました。

その一例を上げると通行筋に対しては！

- ・道路に覆いかぶさっている、木の枝は切り拂こと
- ・見苦しい所は、松葉囲いをし、雪隠（便所）などは、見えないようにすること。
- ・沓、わらじは店先につるしておいてはならない。
- ・鶏、犬、猫等を、お通りに筋に出しては、ならない。  
などの触状が流されました。

宿場や周辺の村々の住民に対しては、和宮様下ノ諏訪宿のお通りお泊りにつき、次のような申しつけがなされました。

- ・火の元は嚴重にせよ。お通りの三日前より日の番五人組を何組もつくっておき、二手三手ずつは、絶えず見回り、お通りお泊りの夜は、とりわけ火の元を大切にすること。
- ・御下向のお荷物運びやそのほかの御用を務める物は、皆精々心がけて、不調法のないようにせよ。
- ・お荷物運びなどの割り当てのない人馬がある村は、お泊りの時、急触れがあるかもしれないから、その節は、遅滞な御用を務めるよ
- ・渡世鉄砲（猟銃）や威銃（空砲）は、唯今からお通り後、五日までは、決して打ってはならない。
- ・糞火（ごみを焚く火）は、お通り五日前から、お通り三日過ぎまで禁止。  
お通り筋ばかりでなく、周辺の村々でも嚴重に禁止する。
- ・お通りの時は人拂いであるから、拝見に出てはならぬ。
- ・お見通しの、田畑、山林へ出てはならない。
- ・お通り三日前から、お泊り後二日までは、漁業船や荷つけ船を使ってはならぬ等々で、もし心得違いの者が有れば。追って、咎（とがめ）めを言いわたす、という申しつけであった。

又 街道筋の整備の申しつけとして

- ・街道幅を2間2尺（4.2m）以上にする。路面を1尺（30cm）掘り下げ、土・砂利・砂を敷き、所々に盛り砂を置く。側溝も作り、その縁に芝生を植える。
- ・道に沿った両側の藪は7・8間（126～14.4m）から30間（50m）くらいまで伐り払う。
- ・街道の主な橋10本をすべて架け替え、小さな橋51本を新しくする。
- ・水流で削られた箇所、山崩れの箇所に囲いをする。
- ・夜の街道を照らす「篝場（かがりば）」を176カ所設置する
- ・街道沿いに水場（手桶・ひしゃく・茶碗）を11カ所設置する。

そのために、下ノ諏訪宿で用意する人足は1万人であり、伊那から甲州にかけて50ヶ村余りに応援を頼んで、ようやく間にあったそうです。

下ノ諏訪宿は、近郊の村を巻き込んで大騒ぎになったことでしょう。

当時の下ノ諏訪の人口より多いのです。

歓迎というよりより下ノ諏訪全体で大騒動であり、1日の宿泊だけで1年分位の動力と神経を費やしたのでしょう。

また、道路や橋の改修など大変で、言うまでもなく高島藩をはじめ宿役人や地元住民の物心両面負担が極めて重く経済的な面の後始末を済ませるに何年もかかったようです。

## ❁豆知識 皇女和宮様はどんな方？

和宮様の正式な名前は、和宮親子内親王(かずのみやちかこないしんのう)です。

弘化三年(1846年)に仁孝(にんこう)天皇の第八皇女として生まれた。十五人兄弟の末っ子で、成人したのは兄の孝明(こうめい)天皇(明治天皇の父)と姉の敏宮(ときのみや)の三人だけです。



6歳の時、11歳年上の有栖川宮熾仁親王(ありすがわたるひとしんのう)と婚約したが、和宮15歳の時、幕府から朝廷に対して「十四代将軍徳川家茂へ降嫁を請う」(公武合体)と執拗な申し出がありました。

兄帝孝明天皇から、この話を告げられた和宮はどんなに驚いたことでしょう。

有栖川宮家への輿入も年内には、と聞かされていたご自身には大変な衝撃であり和宮は拒絶しました。帝も妹和宮の胸の内を思いやり、この結婚には反対の旨を幕府に伝えました。

しかし幕府は諦めず何度となく圧力をかけられ、帝は、仕方がなく、婚約を解消し承諾しました。

この時の和宮様は、「家族や皇室に迷惑がかかってはいけない」と自分の心を押し殺し、江戸へ泣く泣く行くことを決意しました。

その時の和宮様の心情が和歌に残っています。

- 惜しまじな 君と民のためならば 身は武蔵野の 露と消ゆるとも
- 落ちて行く身を知りながら紅葉の 人なつかしくこがれこそすれ

もし、有栖川宮に嫁いだなら、東征軍の大総督で、後に陸軍大将の夫人になられたのに、時代に翻弄された悲劇の皇女様でした。

## その2 下ノ諏訪宿を震え上がらせた天狗党

元治元年(1864)に水戸(みと)藩の尊攘(そんじょう)派は藩主徳川斉昭(なりあき)の藩政改革を機に登場した軽輩武士を中核する急進派で、この中心となったのは武田耕雲斎(たけだこううんさい)、藤田小四郎らで天狗党と呼ばれ攘夷延期を不満として筑波(つくば)山で拳兵しました。



天狗党は京都にのぼり、斉昭公の子一橋慶喜

(よしのぶ)に嘆願し朝廷に訴え、攘夷を実行してもらう目的で大挙西上しました。

その一行は800人程で、京を目指して佐久の内山峠から信州に入り、中山道を和田峠に向って来ました。これに対して高島・松本両藩は幕命をうけて、これを樋橋で迎え撃ったのが11月20日でした。高島藩は千野孫九郎以下約400人、松本藩は家老稲村元良(もとよし)以下350人が動員されました。



戦は午後 2 時ころから始まり日暮れまで続いた。浪士勢は干草(ひくそ)山(やま)の斜面を下ってくる者もあり、なかには陣羽織に白鉢巻の大男が馬で下ってきたので、両藩の射手は大将と思いねらい撃ちし、ようやく討ち取ったのですが、大将ではなく修験者の不動院全海でした。

水戸方の一隊はゲッタ沢を登り、集落の東側の山かげに迂回して撃ちおろし、更に他の一隊は深沢

(ふかっさわ)に出て退路を絶ったために両藩は総崩れとなり、砥川に追い落とされ、川岸を逃げる者、川を渡って松本を目指したものなど、完全なる敗戦でした。

浪士勢は町に下って来て下ノ諏訪宿に泊りましたが、人々の混乱は一通りではなく、家財道具を穴に埋めたり、夜は秋宮の奥の武居入りに逃げこんで寒さに震えて一晩を過ごしました。

翌日 21 日天狗党は、平出、松島と伊那路を天竜川に沿って下っていったこの戦争を「和田嶺(れい)合戦」「砥(と)沢(ざわ)口合戦」「樋橋合戦」などと呼び、この戦で命をおとしたものは浪士勢 14~5 人、松本勢 4 人、高島勢 6 人でした。

明治 2 年(1869)高島藩は浪士のために戦死塚をつくり、翌年には水戸に照介して不動院全海以下 6 名の名を得て碑を建てて供養しました。その後地元の人々を中心に年々の祭りをたやまず、25 年祭、50 年祭、70 年祭、90 年祭、100 年祭など催され、今では水戸との交流が行われています。(下諏訪町ホームページより)



## 相良総三

相良総三(さがらそうぞう)(1839~1868)は本名 小島将満(まさみち)、(四郎左衛門)といい、天保 10 年(1839)江戸赤坂に生まれました。父小島満(兵馬(ひょうま))は下総(しもとうさ)(千葉県)の富裕の郷土で当時赤坂に住み、総三はその 4 男でした。

20 歳のころには文武両道に秀で、特に兵学を得意とし、22 歳のころは教えを請うもの 200 人に及んだといわれています。総三は早くから幕府の政(まつりごと)に疑いを持ち、朝廷の衰微をなげいており、23 歳のとき父親から 5000 両をもらって家を出、同志を集め義勇軍の組織化のため、東奔西走しました。

慶応 4 年(1868)正月、薩摩(さつま)の西郷隆盛(吉之助)や岩倉具視の後押しで 1868 年 2 月に結成された赤報隊は、討幕の先鋒(せんぼう)隊を編成して、その軍裁となり併せて一番隊隊長として、江戸以来の同志を中核とし赤報隊と名付けました。

## 赤報隊

赤報隊とは「赤心を持って国恩に報いる」(誠意を込めて国のために尽くすこと。「赤心」は嘘のない本当の心という意味。)から付けられた隊名で、一番隊、二番隊、三番隊で構成され、相良総三はその軍裁となり併せて一番隊隊長とな



り、赤報隊は江戸に向かいました。赤報隊は官軍先鋒嚮導隊（かんぐんせんぽうきょうどうたい）と自称していました。

相楽総三は、若い頃から尊皇攘夷運動に身を投じていた人物で、1867年には、西郷の密命を受けて活動を行い、戊辰戦争が起きるきっかけを作りました。

### その3 下ノ諏訪宿に滞陣した赤報隊

赤報隊は新政府の許可を得て、東山道軍の先鋒として各地で「年貢半減」を宣伝しながら江戸へ向かい、世直し一揆などで旧幕府に反発していた各地の民衆に熱狂的な支持を得ました。

しかし、新政府は年貢半減の公約について、文書で証拠を残さないようにしていました。

赤報隊が歓迎されたことは喜ばしいことでしたが、実のところ財源が乏しく、年貢半減は無理な話だったのです。

ただ、一度出した触れを引っ込めてしまえば、民衆の反発は免れません。

そこで新政府は、年貢半減の触れを出した赤報隊を嘘つきの「偽官軍」として切り捨てました。

相楽総三の一番隊は反発しましたが、新政府軍の赤報隊捕縛の命を受けた小諸（こもろ）藩などに襲撃され惨敗したあと、下ノ諏訪宿で捕らえられ、相楽ほか幹部隊員を諏訪大社の小木立（現在の秋宮宝物殿北側の秋宮リンクに通ずる小道）の中ほどに連れて行かれ木に縛り付けられました。その夜は、湯水も与えられず冷たい雨に打たれていたと言います。翌日3月3日夕方に高島藩・松本両藩の藩兵が来て、幹部隊員を、相楽を最後にして現在の魁塚の辺に連れて行かれ、何の取り調べや説明もなく、幹部8人の首が切られ晒し首にされた。

他の幹部14名は、片鬢（かたびん）片眉（かたまゆ）をそり落とし（刑罰の一つ）の上、高札場に晒されてから追放されたと言う、極めて痛ましい大事件でした。

二番隊は新政府に従って京都へ戻り徴兵七番隊に編入され、三番隊は各地域での略奪行為が多いということで多くの隊士が処刑されました。相楽は享年30歳でした。

#### 🌸豆知識 高札場とは

江戸時代、幕府から御法度（ごはつと）、掟書（おきてがき）、犯罪人の罪状などを一般庶民に通達する方法として、板に書き示して街道沿いの宿場や街道の追分（分岐点）や関所橋のもと、村の名主宅前などの、人目に付きやすい場所に掲げたものを「高札」といい、これを掲げた場所を「高札場」といいました。

下ノ諏訪宿では、「綿の湯」近くに設置されていましたが、江戸時代中期の宝永年間に当時の宿出入り口である現在の大社通り沿いに移され、明治時代初めまで残っていたそうです。



## 相楽総三の名誉回復とその後

相楽総三は、新政府のための尽力も空しく「官軍と称して勝手に金品を徴収した不届き者」と扱われていましたが赤報隊は「官軍の捨て駒にされた悲劇の主人公」として扱われ、昭和に入ってから彼の名誉が回復しました。

相楽が高島藩士の石城東山(いしがきとうざん)と同志であったことから再三諏訪を訪れていたため、相楽の名は早くから諏訪人の間に知られていたこともあって、相楽の終焉の地である下諏訪では、赤報隊を顕彰する「相楽会」が誕生し、その死を惜しみ刑場を魁塚(さきがけづか)として有志によって慰霊を行ってきました。



そして、相楽の遺族やかつての同志により、雪冤(せつえん)の努力が実り、昭和3年に正五位の贈位があり名誉が回復されました。この間、集められた相楽の書簡等が、慰霊をおこなっている相楽会に寄せられていて、それが一括下諏訪町に寄贈されました。

(相楽総三は今、若い人達にはアニメ「るろうに剣心」の、登場人物として有名な人だそうです。)

しかし、近年の研究で、相楽総三の実像が明らかにされ、新たな見方が出てきました。相楽たち赤報隊は過激行動に走りすぎるくらいがあり、大政奉還の翌日に新政府から「鎮静」するよう念を押されていたにもかかわらず拳兵し、旧幕府軍を挑発するためとはいえ、江戸の市街を焼き払い、伊勢長島藩主から軍資金という名目で3000両を強奪して



いました。相楽たち赤報隊の度重なる独立行動や掠奪ともいえる行為を危惧した新政府は帰還を命令しました。しかし、相楽たちは命令に従わず、隊士を自称する者が金子(きんす)を強奪した噂(うわさ)や、朝命に背いて進軍の道を変えたこと、特に太(だ)政官(じょうかん)勅定書をもとに年貢半減を途中の村々に告示したことは、新政府にとってこれからの財政が動きがとれなくなることが明らかとなり、そのため赤報隊を犠牲にして、些細(ささい)のことももとに、「にせ官軍」として抹殺(まさつ)せざるを得なくなったのが真相だと近年の研究で実像が明らかになってきました。

しかし、時代に翻弄され、斬首された相楽総三をはじめ8名の幹部のことを下諏訪町はこれからも未永く語り継ぎ、祀っていくことが大切なことだと思います。



「下ノ諏訪宿歴史探訪」発行委員（第二区分館 企画室）

分館長 山田貞幸      分館長代理 山田昌宏  
副分館長 武井英昭      主事 谷口和之

順不同

|            |           |
|------------|-----------|
| 文化部長 両角京子  | 副部長 小林慶子  |
| 研修部長 三井敬裕  | 副部長 松本恵美子 |
| 広報部長 小口芳孝  | 副部長 飯塚好伯  |
| 体レク部長 溝口茂雄 | 副部長 山岡幸子  |

発行責任者 山田貞幸  
編集責任者 小口芳孝